

歎たんにしやう異抄ちやうま聽記

曾我量深そがりやうじん

東本願寺

## 序

昭和十七年〔一九四二〕七月十一日はわたくしの生涯忘るることのできない感銘深い日である。それはわたくしが生来はじめて宗門安居本講の講者として本山白書院においてこの『歎異抄』を開講せし日だからである。当日は梅雨あけのたえられないほどむし暑い天候であった。一年前に本講の内命を受けたる際、即座に講本を決定したのは偶然のおもいつきにすぎなかったが、開講の辞を述べたるときには、なにか不可思議の因縁が講本を決定せしめたように感じ、その所懐を率直に表白したことであった。

あの夏は珍しい高温で、開講から八月十日の満講まで三十日間一回も雨にあわなかつた。気温は最高九十七度（華氏）までのぼつたと記憶するが、終始一貫、真宗再興の精神を『歎異抄』から感得したるわれわれ一百五十余名は、能所一体、撰者唯円大徳とともに祖聖親鸞御在生のむかしにかえり、したしく大悲大願の意趣をうけたまわつたことである。

悲しいかな、わたくしの無学無識、聖教の甚深の意義のせんめい闡明などはおもいもよらないところであろうが、さいわいに故北原繁麿、松原祐善、安田理深、日野賢憬の四氏が炎熱のうちに、

真に身命をかえりみず聞書を作り、完成せられたる言語に絶する労苦に対して、まことに感謝の辞を知らざるところである。

昭和二十二年〔一九四七〕五月

京都東山鸞音舎において

曾 我 量 深 記

## 改版の序

親鸞聖人は真実教ということをいわれておりますが、それがなにものためにいわれているのかということ、わたくしこのごろ思うのです。

教行信証、顕浄土真実といいますが、教行信証は真実教の内容をはつきりするために、教行信証というのでありまして、要するに真実教なのでしよう。

真実教といえは、釈尊が教えてくださった真実の仏教ということですが、それは釈尊がはじめて正しい宗教として仏教というものを悟り、それを教えてくださったということでもあります。だいたい教えというものは、悟りを開いて説法することによって、はじめて教えになるのでしよう。釈尊は悟りを開くことに心血をそそがれたことはもちろんであります。その悟りが教えになるには、それをさらに倍加するほどのご苦労をなされたのでしよう。

悟りということと教えということの関係は、悟りがすぐ教えにはならない。ですから、真実教とは悟りをどうして説くかということではなしに、やはり悟りをもう一つさらに深くほりさげて、教えを感得されたのでしよう。

悟りが悟りで終わってしまったならば、なにもないので、悟りのよってきたところ、従来するところ、帰着するところ、そういうものを掘り上げて教えというものを感得せられたわけでありましょう。ですから、仏教というものは、そう簡単にきめるわけにはいかぬと思います。その教えが原始仏教、小乗仏教、大乘仏教、他力本願の教えと展開してきたのでありましょう。展開といいますが、ただ源から末へ流れてきたというものはありません。むしろ源へ源へと帰されていくのでしょうか。仏教の歴史はそうなっているのでしょうか。

法然上人は阿弥陀仏の本願が真実の教だということを明らかにしようとしたのでしようけれども、それは完成されずに、親鸞聖人にゆずられたと、わたくしは思います。

したがって、わたくしは『歎異抄』では、第一章が真実教を明らかにしたものであると思うようになりました。そうしてみると、第二章は真実行であり、第三章は真実信、第四章は真実証であると思います。それから第五章は還相回向だと思えます。ですから、はじめの五章で教・行・信・証から還相回向まで明らかにされたものであると、こういうようにこのごろ考えるようになりました。

わたくしが安居の講義をしましたところは、戦争のまったなかで、戦局は「支那事変」から「大東亜戦」へ拡大するという時世でもあり、国民の心も非常に暗く、食糧事情なども悪かったのですが、遠く「満州」や「支那」からもたくさんのかたが聴講にきておられたようです。

安居にあたって、その講本をまとめてほしいといわれておったのですが、他の聖典ならば考えたり準備をしたりしなければなりません。『歎異抄』であればいつでも講義できますとご返事して講本もつくらなかつたのであります。

そんなわけで聴講にこられた皆さんが聴記をつくってくださったのです。物資が不足して紙なども思うように手に入らなかつた時代でありましたが、皆さんのご苦労でこういう講録もできたのであります。

昭和四十二年（一九六七）二月

京都東山にて

曾 我 量 深（談）

目次

序 講

真宗再興の精神と『歎異抄』…………… 4

第一 講

一 『歎異抄』の編者について…………… 7

二 歎異精神を基調として…………… 12

第二 講

一 『歎異抄』の特徴と造意…………… 19

二 『歎異抄』の文章…………… 23

三 機法二種深信について…………… 28

四 真宗教相の根源としての本願欲生…………… 33

第三講

一 ふたたび本願欲生について…………… 37

二 信における願の問題…………… 40

三 三信と五念…………… 47

第四講

一 他力信と他力回向の信…………… 55

二 行信の問題…………… 56

三 伝統の本義…………… 63

四 本文第一条の科について…………… 67

第五講

一 『歎異抄』の構造…………… 71

二 善悪の問題…………… 78

三 大慈悲心と無常感…………… 81

四 『大無量寿経』と『涅槃経』…………… 84

第六講

一 本文第一条について…………… 89

二 宿業本能の問題…………… 100

三 第一条と御物語十か条との関係…………… 104

第七講

一 仏教の世界観について…………… 107

二 本願欲生心と二河譬…………… 110

三 本文第二条の文章…………… 113

四 念仏の大道…………… 117

五 自覚の道としての仏法…………… 121

第八講

- 一 安心訓と起行訓.....125
- 二 本文第二条について.....127
- 三 親鸞の名のり.....130
- 四 称名と憶念.....133
- 五 よき人の仰せ.....135
- 六 念仏即生活.....137

第九講

- 一 表現の單純性.....145
- 二 念仏の伝統.....147
- 三 行巻と信巻との關係.....149
- 四 法然・親鸞の相承.....151
- 五 御物語の文章.....156
- 六 地獄一定の自己否定.....159

第十講

- 一 就人立信について.....165
- 二 親鸞の仏教史觀.....168
- 三 釈迦・善導・法然の伝統相承.....171
- 四 本文第三条について.....174

第十一講

- 一 宿業の自覚と機の深信.....181
- 二 法藏菩薩と法藏魂.....187
- 三 深信の意義.....191

第十二講

- 一 御物語十か条の科について.....195
- 二 『歎異抄』の背景としての『觀無量壽經』.....199
- 三 ことばのいのち.....202

四	本文第四条について……………	205
	第十三講	
一	本文第五条について……………	213
二	本文第六条の大意……………	226
	第十四講	
一	本文第六条について……………	231
二	還相回向の世界……………	234
三	本文第七条について……………	238
四	歴史的事実としての神の示現……………	241
五	日本人の単純感情……………	244
	第十五講	
一	絶対自由の境地……………	249
二	本文第八条について……………	254
三	第九条にえがかれたる光景……………	257
	第十六講の一	
一	信心の同一性……………	267
二	個人的自覚の歴史的展開……………	271
三	宿業の世界……………	277
	第十六講の二	
一	真宗再興の精神としての信の一念……………	281
	第十七講	
一	本文第十条について……………	287
二	異義八か条の構造とその大要……………	297
	第十八講	
一	本文第十一条について……………	307



二 光明本願と名号本願……………	319
三 第十二条における文章の語勢……………	322

## 第十九講

一 真宗における学問の意味……………	327
二 宗義と宗学……………	332
三 学生の甲斐……………	335

## 第二十講

一 罪惡怖畏の異義について……………	345
二 宿業にもよおされて―善惡宿業の内観……………	351
三 宿業をはなれて本願の不思議なし……………	356
四 外現賢善精進之相……………	361
五 業報にさしまかせて……………	362
六 『唯信鈔』のことは……………	363

## 第二十一講

一 罪福信ずる心……………	365
二 宿業の世界……………	369
三 道徳心と宿業に随順する心……………	370
四 歴史・国土……………	374

## 第二十二講

一 念仏滅罪の異義について……………	379
二 一念發起の信心……………	385
三 摂取不捨の願……………	392
四 異義概観……………	394

## 第二十三講

一 即身成仏の異義について……………	399
二 永遠の未来の世界……………	402

三 弥陀の願船に乗じて……………403

四 物質主義と唯心主義……………405

五 自我の世界に国土なし……………407

六 自然回心の異義について……………411

七 ただ一度の回心―回心の真義……………413

八 往生は如来に……………415

第二十四講

一 信心はわれわれの問題……………417

二 内懷虚仮の内観……………418

三 親鸞聖人の世界観……………424

四 辺地墮獄の異義について……………428

五 施量別報の異義について……………430

六 方便報身の問題……………433

七 隱彰の実義……………435

第二十五講

一 観と見……………439

二 信心相論について……………442

    (一) 如来回向の信心……………442

    (二) 唯円の述懐……………454

三 聖人のご述懐……………458

    (三) 親鸞一人がためなりけりの感銘……………458

第二十六講

(四) 歴史的親鸞……………463

(五) 二種深信……………469

四 善悪の二つ総じてもって存知せず……………475

結 講……………483

語句解説……………489

解 説……………505

一、本書は昭和五十五年（一九八〇）二月二十日真宗大谷派宗務所出版部発行の三訂版を底本とし、昭和十二年六月二十日大谷出版協会発行の『歎異抄聴記』初版本、その忠実な翻刻である昭和四十六年七月十日弥生書房発行の曾我量深選集第六卷（『歎異抄聴記』本を校合して本文を確定した。なお、三訂版は昭和四十二年八月三十日日本山出版部発行の改訂版を底本にしている。この改訂版は旧漢字を当用漢字に直し、現代かなづかいにあらため、漢字をひらがなに直して、一般読者に読みやすい版を提供することに主眼を置いたものである。本書もこの改訂版・三訂版の趣旨を踏襲し、さらに誤字脱字を訂正したほか正確で読みやすい文面をめざした。また過度なひらがなの使用はかえって読みにくい面もあったので、漢字に復帰した部分もある。

一、歎異抄の本文は本山出版部発行の『真宗聖典』によった。ただし、原典と違っていても著者の教学の本質と深く結びついていると思われるものは、そのままにした。

一、その他の引用文の出典は『真宗聖典』ならびに『真宗聖教全書』（大八木興文堂）によった。ただし同じく、原典と違っていても著者の教学の本質と深く結びついていると思われるものは、そのままにした。

一、出典の略号は左記のごとくした。

〔『真宗聖典』四五六頁〕——（聖典四五六）

〔『真宗聖教全書』第一卷 三経七祖部 四五六頁〕——（聖全一・四五六）

一、現在から見て問題があると考えられる語句や表現をかぎ括弧でくくったり削除した部分もある。それらについては巻末の解説でふれた。

一、語注と解説を巻末に附した。なお編集方針については解説でふれた。

歎 異 抄 聴 記

## 序 講

竊回愚案粗勘古今、歎異先師口伝之真信、思有後学相統之疑惑、幸不依有緣知識者、争得入易行一門哉。全以自見之覺悟、莫乱他力宗旨。仍故親鸞聖人御物語之趣、所留耳底、聊注之。偏為散同心行者之不審也云々。

今般、嚴命をこうむりまして、ここに『歎異抄』開講の儀におよんだしだいでありませう。今は弘法について、ことにわが浄土真宗におきましては、内外のことからにつきましまして第二の再興を要する時期に再会していると思われただいでありませう。時代相応の真宗教学の建設ということが諸方にさげられるのであつて、このときに際しまして、まことに偶然か必然かわたくしどもにはまったくわからぬことではあります、『歎異抄』をえらばしめられて嚴命にこたえることになりましたことは、まことに不可思議のご因縁と感ずるしだいでありませう。

わがご開山聖人の親しく撰述された聖教は数多くありますが、この『歎異抄』は明治の末ごろから宗門の内外にあまねくいきわたり、ご開山聖人の信仰に謁せんと思つひとびとは、まづもつて『歎異抄』を拝読すべきであるということは、今日わが日本の全体にわたつて世論であります。だいたい『歎異抄』はただいま拝読したるはしがきにあるとおり、「故親鸞聖人御物語之趣、所留耳底、聊注之。偏為散同心行者之不審也云々」とあつて、この『歎異抄』の編者については、香月院深勵師は三文一理ということをとて、おそらくは如信上人のご撰述であらうと推定された。もしそうであるとすれば、如信上人のご撰述はほかにないのであつて、上人がじきじきにご開山聖人よりおうけたまわりになつたことをしるされたものであ

るといふことになるならば、『歎異抄』の真宗教学史上における意義は重大であります。しかるに妙音院了祥師は、この『歎異抄』を一生のあいだ研究されて、『歎異抄』の編者はそこに求める必要なく、この『歎異抄』のうちのみずから名をあげている唯円房その人なりと推定していらひ、現今では一般の人は唯円撰述と認めていらひであります。もし『歎異抄』が了祥師の決定のごとく唯円の撰述とすれば、ご開山聖人の直弟子の著述としては唯一のものとなつて、また別の意義において『歎異抄』の真宗教学史上における位置はまことに重要であると感ぜられるしだいでありませう。

『歎異抄』は申すまでもなく、「先師口伝の真信に異なることを歎き」とある。その「先師口伝の真信」とは、この『抄』いたるところにあるところの善導大師いらひ伝承の二種深信であります。この二種深信こそ、定散二心をひるがえし貪瞋二河の譬喩を説いて弘願の信心をあきらかにするのが、この善導大師の自覚道の体であるといたゞいであります。それでわたくし思いまするに、この『抄』の題目である「歎異先師口伝之真信」、この歎異精神、歎異感情といふものこそ、これは浄土真宗再興の精神なりと深く感じられるしだいでありませう。これこそ浄土真宗再興の精神である。ゆえあるかな、蓮如上人におかれては、「右斯聖教者、為当流大事聖教也。於無宿善機、無左右不可許之者也」としめされては、これおそらくは蓮如上人が真宗を再興されたご精神がこの歎異の精神にはかならないのであると、

わたくしは深くいただいているものであります。この歎異の精神なるものは古今内外を通じて一味の安心、如来回向の大信心にうらづけられて成立しているものであるといただくしだいでもあります。はたしてそうであれば、今日わが浄土真宗の第二の再興が内外よりうながされていく時代において、師命を拜してここに『歎異抄』を講ずることとなったことは、わたくし個人にあっては偶然であるが、これには深い歴史的意義をもっているのではなからうかと、わたくしは今日深く感ずるしだいであります。

開講にあたって感興の一端を披瀝<sup>ひれき</sup>して開講のことばとするしだいであります。

## 第一 講

### 一 『歎異抄』の編者について

昨日開講の席において述べましたごとく、蓮如上人が真宗を二再興なされまして、それよりすでに四百五十年ちかかったたのである。今やわが浄土真宗第二の再興ということが、内外、いろいろの方面より要望されてあることは、わたくしばかりではなく、みなさんも感じていられるところであろうと思う。なにかも宗門のあらゆる施設がまにあわぬことは、みなさんもお承知のことと思う。それでむかし、蓮如上人も真宗再興の大事業を完成されたことを思うと、その上人の真宗再興の内面的基礎がどこにあるかということ、自分はこのごろ考えている。すると『歎異抄』の奥書に、これは昨日も言ったことであるが「右斯聖教者、為当流大事聖教也。於無宿善機、無左右不可許之者也」、このことは、香月院師などはこれを重大視して、『歎異抄』は一方には称名念仏の願力を強調するとともに、他面とくに悪人正機とい

う大悲願心を深くほりさげている。これは勸信誠疑に属するものである。それを蓮如上人がご注意なされてこの奥書をしるされたとみていられる。なるほどそれはそうであるが、わたくしはこれとともに、蓮如上人は『歎異抄』において、上人みずから真宗再興を達成された内面的動機を『歎異抄』によって感得されたと思うのである。この意味で奥書をしるされたのであると思う。これはわたくしの感じで、どこかにその証明があるというのではないが、わたくしの感覚として言うのである。『歎異抄』は法のほうには称名念仏、機のほうには悪人正機という二種深信がめだっている。それについていろいろのことが考えらえるが、ことに「歎異先師口伝之真信」とある。この先師口伝の真信に異なることを歎くということが、この『抄』の造意であろうと思う。これは一番しまいのところにも、「かなしきかなや、さいわいに念仏しながら、直に報土にうまれずして、辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。なづけて『歎異抄』というべし。外見あるべからず」(後序)。これが簡単であるが造意をあらわすものである。これについてはそのときどきにくわしく話していきたい。これとともに「先師口伝之真信」、先師という『歎異抄』の著者は、昨日もそのことにふれたのであるが、編者はだいたいわからぬというのがすわりである。著者みずから署名していないからである。しかし、わからぬだけではすまされないことである。著者みずから名を知られることを好まぬようであるが、われわれがお蔭をこう

むっているこのだいなお聖教の著者を知らぬということはすまされぬことである。ただ知ろうとねがうのみである。むかしから『口伝鈔』『執持鈔』などと並べてみて、共通のことが書かれてあるから覚如上人のものという一部の人もあるが、これはおおざっぱな考えである。わが大谷派では恵空師らしい、これは如信上人の作であろうと考え、これを香月院師は『口伝鈔』と比較して、『口伝鈔』と『歎異抄』と同じことが書いてあるが、表現内容もちがうので、これが覚如上人の作とはみられない。そして『口伝鈔』には三代伝持——法然上人、親鸞聖人、如信上人と——の口伝をしるされるところから、三文一理、三つの文証と一つの理証よりして、おそらくは本願寺第二世如信上人の製作であるとした。これは香月院師のほねおりで、ごもつともと思われる。しかるに同師の弟子の一人である妙音院了祥師は、このかたはみなさんもご承知のように、えらい学者で、とくに『歎異抄』研究については古今独歩である。この人が師の研究を一々検討して、だいたい師の研究は外廓を描く間接的研究であるが、それに対して了祥師は鋭い直観でもって、この著者はほかに求めることはいらぬ、『歎異抄』の中にみずから名のっている。問いに落ちず語るに落ちている。そこでどこどころに名のっている唯円その人であることを直観した。この了祥師の聞書が明治の終わりごろに、東京の平松理英氏によつてはじめて刊行された。これにより『歎異抄』の研究にさかんにもちいられるようになった。それまでは、香月院師の講録ひとつであったが、今日では了祥師の講録にしたがって、こ

の著者が唯円であることはだれも疑わぬところである。なるほど一方よりみれば、如信上人の作であるということは、これが聖人の直後をつがれた如信上人の作とすれば、非常に尊いものとなる。これに対して、聖人の直弟子の一人である唯円の作となると、われわれの先輩の一人の作として、また異なった意味で重要になる。わが聖人の門弟中には一部の著作もない。直門の著作としてはこれが唯一のものである。そして、如信上人の作とすると、如信上人が直接聞かれたこともあろうが、大部分はただ開山聖人のおそばにはべつてほかの人と話されるのを、そばで聞かれたということになる。しかるに、これが唯円の編さんということになると、この中にもしばしばでるように、唯円に直接に呼びかけて話されたものとなるから、唯円の感銘はまた特別である。今読んだ序文をみ、また後序のことばを拝読すれば、どうもこれは如信上人の作というよりは、唯円の編さんのようにみえる。「故親鸞聖人御物語之趣、所<sub>レ</sub>留<sub>ニ</sub>耳底、聊注<sub>ニ</sub>之」とあり、また第十条をみると「そもそもかの御在生のむかし（中略）いわれなき条々の子細のこと」とある。これなどは第二条の「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり」というのとあい応じているのである。聖人は京都にお帰りになった。今第十条のことばをみると、どうも『歎異抄』の編者は、聖人がご帰洛後に関東にとどまっていたにちがいない。「そもそもかの御在生のむかし、おなじころざしにして、あゆみを遼遠の洛陽には

げまし」とある。これと第二条を照らし合わせてみると、おのおの十余か国のさかいをこえてきて、きびしいご化導をこうむったその中の一人が、『歎異抄』の編者である。そうしてみると如信上人ではない。如信上人は常にご開山聖人といっしよにおいでになった。これをみると如信上人の作というよりは、唯円の作というほうがよいと思う。全体の文章をみると、とくに第十三条をみても、唯円の作にちがいない。また第九条をみると、突然として「念仏もうしそらえども、踊躍歡喜のころおろそかにせうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのせうらわぬは、いかにとせうろうべきことにてせうろうやらんともうしいれてせうらいしかば」と、だれがだれに申し入れたのやら、これは日本文の特徴であるが、これはまた日本文としてもまれな文章である。ちかごろの文章は一句一句に汝とかわれとか一句一句に自分が名のりあげている。しかるに今第九条をみると、だれがだれに問うたのかわからぬ。突然として「念仏もうしせうらえども」云々とあつてわからぬ。近代人は権利義務ということがはっきりしているゆえ、こんな、だれがだれにということがはっきりせぬのは、きわめてあいまいに見えるだろう。しかし日本の国民性よりみると、はじめにはなにも書いてないが、静かに読んでいくと、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」とあつて、ここにきたつて問われ手が師の親鸞で、問い手は弟子の唯円であるということがはっきりしてくる。このような心境は、日本伝統の独自のゆかしき国民性かと思えます。ここに「唯円房おなじこ



ころにてありけり」と、これは問いを申しあげた人でなければこの文は書けないと了祥師は鋭い直観で唯円作とおさえた。これは直観である。それほど鋭き直観力をもつ了祥師であるから、この問書を見ると、なにもつけ加える要のないほど確実に論証されている。だいたいは了祥師の説によって、しかし自分は自分として『歎異抄』について考えをもっているから、それはそうとしてお話をしていきたいと思う。

## 二 歎異精神を基調として

そしてわたくしは、だいたい『歎異抄』をとおして昨日申したような真宗中興の精神、われわれはこの精神をよびおこしてやる。そうなければならぬと思う。われわれはみな蓮如上人のなされた真宗再興という大事業、これはもちろん蓮如上人お一人で真宗再興をされたのではなく、上人が陣頭にたつて門末をひきい、師弟心を一つにして再興された。有名なるものも、無名なるものも、みな一心同体になって、真宗再興という大きな事業を完成されたにちがいない。それならば今日われわれは、現代の善知識を陣頭におたて申して、師弟一心同体になって新しく真宗再興という大事業に進まねばならぬ。その再興の原理、再興の精神が『歎異抄』にあらわれているということをおたくしは感じている。これは昨日いったように歎異の精神である。信心異なることを歎く精神、だれが異なるかということ、自分が異なっている。異なるのは自分

歎異精神を基調として

である。『歎異抄』をちよつとみると、異なっているのは他人であるようにみえるが、それだけではないとわたくしは思う。その異なりは自分であるというのが、ご開山聖人の御物語十か条を拝読してみると、異なりは自分にあることを痛切に知らしていただくのであって、すなわち編者の唯円も、異なりは自分にあることを痛感していたとわたくしは思う。それがもつともあきらかにあらわれているのは、第九条である。第九条の唯円の問いをみると異なりは自分にある。「念仏もうしそうらえども」と、同じく形は同一念仏である。ご開山聖人と同一念仏を行じているものである。しかし、自分の安心はどうか、「踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」、念仏の行においては師と同一であるが、その安心においては師と等しいかどうかという問題を正直に披瀝ひれきしてお問い申したのである。ほんとうに深く先師口伝の真信に異なるものは、ほかにあるのではなく、自分にあることを歎異されたのである。これに対して聖人は「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」、この唯円の歎異の精神が聖人ご自身に響いてきたから、「親鸞もこの不審ありつるに」と、おまえたけではない、親鸞もこの歎異の精神は同様であるといわれた。それからこの歎異の精神をおすすめて、その背景になっているものをおしだされて、「よくよく案じみれば」と仰せられた。ここに「よくよく案じみれば」の前に「しかしながら」とか、「けれども」とかいうことははない。以前

には、わたくしどもはこれをつけ加えてうかがって来たけれども、この「しかしながら」ということは、いらぬのである。歎異精神のその背景を開いて、歎異精神に即して、歎異精神を超えて「よくよく案じみれば」、この歎異精神をおさえて「よくよく案じみれば」と仰せられたのである。これを拝読すると、かく了解できる。わたくしは、以前は唯円とご開山聖人と安心において異なっているのを、聖人が気の毒に思われて、ちようど学校の先生と生徒のように、先生が生徒をみちびく方便としての一つの教育方法と考えられ、聖人はよき教育者であると思われた。この考えかたは根本的にまちがいだとはいえないが、そんなまぬるいことではない。この異なることを歎く深い歎異感情をつきぬけて如来回向の一味の安心が自証される。そこにはじめて真宗再興ということが成就するとわたくしは深く感じていたものである。ゆえに、信心の問題を単に個人的に考えてくれば、各自各自みな異なっている。これを同じというのは抽象である。個人的安心といえは、ちがうのがほんとうであろう。それを抽象して、ただ共通点のみを発見して平等というにすぎない。ただ抽象的な共通点よりも、各自各自異なっている具体的内容がだいじである。それを抽象して同一といっても無意味なことである。具体的なものが大事である。こういうことをあきらかにしたいと自分は思っているしだいである。

このようなことで、著者未詳というのがほんとうであろうが、だいたい唯円らしい。だいたい、そこらに見当をつけて一部を拝読すればまちがいないと思われる。

それから、「歎異抄」の組織をみると、だいたい前後二編になる。前編は、「竊回愚案」より第十条の「念仏には無義をもつて義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき」までが前編あるいは第一編である。そうして「そもそもの御在生のむかし」より終わりまでが第二編もしくは後編である。第一編は「故親鸞聖人御物語之趣、所留耳底」を十か条だけあげ、遠き聖人ご在生のいにしえをしのびまつた。これはだいたい、破邪顕正よりみれば顕正が主になっている。しかし、そのうらにはかならず破邪がある。それから、第二編はまさしく破邪が主である。第十一条より第十八条まで、異義八か条をあげて、前十か条の御物語をもとにして、八か条の異義を批評している。そして第十九条はその異義のよってきたるところをあきらかにする。「右条々はみなもつて信心のことなるよりおこりそうろうか」といって、それから異義八か条の根本をあきらかにして、そして歎異精神を強調しているのが第十九条であると思う。

しからば、「先師口伝之真信」とはなにか。先師口伝の真信ということ『歎異抄』一部を通じて積極的にあきらかにしている。この先師口伝の真信とは、これすなわち機法二種深信である。善導大師の『散善義』ならびに『往生礼讚』に二種深信をあきらかにしてある。『歎異抄』に信心というのは、二種深信のことである。信心とはなんであるかといえは、定散自力の心行に対して、ほんとうに無善造悪の機に念仏往生の誓願をいただく、これが二種深信である。